参考文献　『療養生活』（一号～四九五号）自然療養社。『最新自然療法指導書』田邉一雄著、自然療養社。『肺病患者は如何に養生すべきか』原栄著、主婦の友社。『結核征服』茂野吉之助著、新潮出版。『肺病に直面して』茂野吉之助著、新潮出版。『あくまで希望あれ』西須諸次著、自然療養社。『療養者のつづる日本の肺病』和達清夫編著、結核予防会、複十字会。

このささやかな論文を謹んで父田邉一雄と複十字会に捧げる

（平成七年九月例会）

熱海噴汽館（きゆうきカン）

尺　次　郎

明治十六年熱海に療養中の右大臣岩倉具視は熱海が気に入り、離宮と肺病患者の為の療養所の建設を計画した。当時熱海に湯治に来る肺病患者が多く、風光明媚な地に害毒を及ぼす事を心配し、患者を一か所に集め指導し治療する療養所が、宮内省と内務省の共同事業として始められた。間欠泉として噴出する大湯の良質、豊富な湯量を利用して、その蒸気を患者に吸入させる方法を考えた。岩倉は腹心の宮内省御用係肥田浜五郎、内務省衛生局長長与専斎、後藤新平に建設を命じた。肥田は今井半太夫から大湯の隣の地所を宮内省に献納してもらい取締役とした。長与は衛生局員に内部の施設を整えさせ、保管は静岡県が当たることとした。

明治十七年六月建物は完成し、十八年二月業務を開始した。初代浴医長は神内由己で静岡県が月俸一二〇円で招聘した。後に温泉療法に熱心な中浜東一郎も浴医長となった。

明治十九年一月には改良を加え、器械装置の増設、吸気室の整備を行った。主眼は温泉蒸気の吸入で、大湯が噴出する度に蒸気を吸気室に導き鋼鉄製の鳥籠のようなものの中に蒸気を密閉し、それに孔をあけてパイプを付け、口をつけて蒸気を吸入した。別に浴室を設けそれぞれの疾患、状態に応じて入浴させた。ドイツから取り寄せたスピロメーターなど最新式の器械器具を備え、測候所も付設していた。各温泉宿に逗留している患者の希望に応じて吸気や治療の方法を指示した。温泉場取締所が館内にあり、衛生に関する業務を取り扱った。付属の大湯遊泳場の設備もあった。これらの施設を利用する病人や浴客から診察費や料金を徴収して経費を賄った。

明治二十四年四月宮内省に移管して御料局長から温泉業者一同に払い下げられたが、大正九年火災で消失した。小生の曾祖父尺振八がここで療養したのではないかと思われるが、該当した文献は発見されていない。

（平成七年九月例会）